

令和7年度 調布市立調和小学校 学校評価報告書（学校長 安藤 力也）

学校の教育目標

豊かな心のハーモニーを奏でる学校

○心もからだも健康な子（心とからだのハーモニー） ◎よく考え、学びあう子（学びのハーモニー） ○力をあわせてやりぬく子（協力・協働のハーモニー）

目指す学校像(ビジョン) 例) 学校像, 教員像, 児童・生徒像

【目指す学校像】

(1) 児童が学びたいと思う調和小 (2) 保護者が通わせたいと思う調和小 (3) 教職員が勤めたいと思う調和小 (4) 地域が誇りに思う調和小

【目指す教師像】

(1) 「よさを大切に」～find the good～
 (2) 「すべては子どもたちの笑顔のために」～all for smile of children～
 (3) 「Team 調和」～one for all, all for one～

【目指す児童像】

『Respect for oneself and others』
 ◇「自分のよさに気づき、自分を大切に」 ◇「他者のよさを認め、大切に思う」

調布市立学校における共通した領域 <短期的な経営目標>

	1 豊かな心(徳)	2 確かな学力(知)	3 健やかな体(体)
	(1) 具体的な取組	(1) 具体的な取組	(1) 具体的な取組
	①学校経営方針の柱として「自尊尊重の精神の涵養」を位置付け、校長自ら全教育活動を通じて、自分や他者を大切にすることに関連して、教員、地域・保護者、児童に発信することで一層の涵養を目指す。	①主体的・対話的で深い学びとなるための学習を展開する。また、主体的に学ぶ児童の姿とはどのような姿を指すのか、教職員が共通理解するとともに、協働的な学習で多様な考えをもとに解決を図ることのできる力を児童に身に付けさせる。	①体力テストの結果から児童の体力の現状を踏まえた体育科における授業力向上を目指す。日々の体育授業や体育的活動の充実を図ると共に、児童の運動の日常化を目指した取組の充実を図り、体力向上を目指す。
	②人権教育を基調とし、生命尊重の精神を培うとともに、開校以来受け継がれている『調和の心』、具体的な姿としては、「良いもの正しいものを受け継ぎ高めていく心」「徳・知・体の調和のとれた発育・発達」が具現化できるように指導を重ねていく。	②児童一人1台タブレット端末をはじめとするICT機器を効果的に活用した授業を積極的にを行い、児童の思考力・表現力、情報活用能力、メディアリテラシーを育む授業の推進を図る。	②一校一取組として実施する「長縄跳び」をスポーツフェスティバル競技として全校で年間を通して実施する。また、令和6年度から実施している「ちょこぶら1」を一層充実させ、児童が体を動かすことの楽しさを味わえる計画を実施する。
	③児童の主体性を育み活動を通して他者とかかわりあう中で、自己肯定感、自己有用感を得たり、喜びを感じたり、互いの心が通じ合う心地よさを味わうことができるよう、意図的・計画的な活動を展開する。	③校内研究では「自ら学ぶ児童を育成する指導法の研究」を研究主題に据え、各教科・領域等の指導方法の基礎・基本とともに、児童が主体となって学ぶ授業づくりに向けた授業改善を目指す。	③学校2020レガシーを継承するとともに、外部人材の活用を通して、基礎的な運動能力の向上と運動することで味わうことのできる楽しさや喜びを経験させられるよう計画・実施する。
	④異学年交流の充実を図るために「たてわり班」での活動を年間を通して実施する。たてわり遊びの時間を十分に確保し、児童がリーダー、フォロワーを経験し、互いを思いやる心情や自治的活動の企画・運営等を味わわせる。また、第3学期には「たてわり班給食」を実施する。	④教科担任制や教科交換授業の実施（対話的で深い学びを目指して）、校内研究や年次研修における実践的指導力の向上、個々の児童に適した学習指導方法の導入（個別最適化の授業展開を目指して）等を意図的・計画的に実施をする。	
	(2) 成果(数値目標に対して)	(2) 成果(数値目標に対して)	(2) 成果(数値目標に対して)
自己評価	①学校評価(自己評価) アンケート「豊かな心の育成」に関する項目では、肯定的意見(A・B)の割合は、教職員が100.0%と極めて高く、豊かな心の育成に向けた指導や取組が、校内では十分に行われているという強い認識が示された。保護者においても90.7%と高い評価となっており、学校の教育活動を通して、子どもたちの思いやりの心が育っていると受け止められていることが分かる。一方、児童の肯定的意見は77.6%と、教職員・保護者と比べるとやや低い結果となった。特に、児童回答ではEが15.4%と一定の割合を占めており、「思いやりをもって生活しようとしている」と実感できていない児童が一定数存在することがうかがえる。このことから、取組自体は充実しているものの、児童一人一人が自分の行動や成長を肯定的に捉えきれていない可能性が考えられる。 学校評価(自己評価) アンケート「学校行事」では、肯定的意見(A・B)の割合は、教職員が100.0%、保護者が95.7%と非常に高く、学校行事が子どもたちの目標意識や成長につながるよう、計画的かつ意図的に取り組まれていることが高く評価されている。一方、児童の肯定的意見は77.8%にとどまり、教職員・保護者との間に一定の認識の差が見られた。児童の回答では、77.8%が肯定的ではあるものの、C～Eが22.2%と比較的高いことから、行事に参加はしているものの、「自分なりの目標をもって取り組めた」という実感を十分にもてていない児童が一定数いることがうかがえる。	①学校評価(自己評価) アンケート「学習理解」に関する項目では、肯定的意見(A・B)の割合は、教職員が97.4%と非常に高く、児童が楽しく理解できる授業づくりに向けた工夫が、教職員の間で広く行われているという認識が示された。保護者においても87.8%と高い評価となっており、家庭から見ても、授業内容の理解が概ね図られていることがうかがえる。一方、児童の肯定的意見は81.5%と、教職員・保護者と比べるとやや低い結果となった。児童の回答では、C～Eが約18%見られ、特にEが8.9%と一定数存在していることから、「授業がよく分かる」と実感できていない児童がいることがわかった。学習内容の難易度や学習の進度、個々の理解の差が影響している可能性が考えられる。肯定的な回答が多いものの、学年が上がるにつれて学習内容が抽象的・高度になることに加え、「分かったつもり」と「本当に理解している」との差を、児童自身が意識できるようになることが、自己評価の厳しさにつながっているとも考えられる。 なお、全国学力・学習状況調査における平均正答率は都正答率に対して国語7ポイント、算数9ポイント、理科10ポイント、それぞれ上回った。	①学校評価(自己評価) アンケート「体力向上」に関する項目では、肯定的意見(A・B)の割合は、保護者が91.1%、教職員が89.5%と高く、体育授業や各種体育的活動が、子どもたちの体力向上や運動への意欲につながっていると受け止められていることが分かる。児童においても83.3%が肯定的に回答しており、多くの児童が体育や運動に前向きに取り組んでいる様子がうかがえる。一方で、児童の回答ではC～Eが合わせて16.8%見られ、運動に対して苦手意識や不安を感じている児童が一定数存在することがわかった。特に、中高学年においてはC～Eの割合が低学年よりも高く、技能差の拡大や体力差の自覚が、楽しさの実感に影響している可能性が考えられる。 東京都児童・生徒体力・運動能力、生活・運動習慣等調査結果体力合計点については6年男子0.2pt、4年男子0.4pt、4年女子1.1ptが都平均値を上回った。また、全国体力・運動能力、運動習慣等調査意識調査「体力授業で目標を立てている」児童は85.5%であった。
	②学校評価(自己評価) アンケート「あいさつ励行」に関する項目では、肯定的意見(A・B)の割合	②学校評価(自己評価) アンケート「主体的学び」に関する項目では、肯定的意見(A・B)の割合は、教職員	②体力テストの結果から児童の体力の現状を踏まえた体育科における指導の工夫や取組について資料を基に

	<p>を見ると、教職員は92.1%と高く、教職員自身は「あいさつを促す指導や工夫が十分に行われている」と強く認識していることが分かる。一方、保護者は71.9%、児童は68.7%と、教職員の評価に比べて20ポイント以上低い結果となった。この差から、学校側の取組や指導の意図が、必ずしも家庭や児童自身の実感として十分に伝わっていないことがうかがえる。また、児童の回答では、C～Eが31.3%と比較的高く、一定数の児童が「あいさつをすすんで行っていない」と自己評価していることがわかった。あいさつが「言われればできる」「場面によって差がある」など、行動が定着段階に至っていないことが考えられる。</p> <p>また、「規範意識」に関する項目では肯定的意見(A・B)の割合は、教職員が100%と非常に高く、きまりや基本的な生活習慣を身に付けさせるための指導が、校内で継続的かつ組織的に行われているという認識が示された。保護者においても87.6%と高い評価となっており、家庭から見ても、子どもたちが一定程度きまりを守り、生活している姿がうかがえる。一方、児童の肯定的意見は79.0%と、教職員・保護者に比べるとやや低い結果となった。特に、児童の回答ではC～Eが21%と一定数見られ、この結果から、きまりを守る行動が場面によって安定していない、あるいは自己評価が厳しくなっている実態が推察される。</p>	<p>が94.8%と高く、ICT機器の活用や子ども同士の学び合いを意識した授業づくりが、継続的に進められているという認識が示された。保護者においても79.4%と一定の評価が得られており、学校の取組が家庭からも概ね理解されていることがうかがえる。一方、児童の肯定的意見は66.6%と、他の項目と比較しても低い水準となっており、教職員・保護者との間に認識の差が見られる。児童の回答では、C～Eが約33%を占めることから、「自分の考えを伝え合ったり、学び合ったりしている」と実感できていない児童が一定数存在することがわかった。学年が上がるにつれて、自分の考えを言語化する力や他者の考えを踏まえて発言する力が求められるため、発言への不安や難しさを感じている児童が増えている可能性が考えられる。</p> <p>なお、全国学力・学習状況調査(意識調査)では、「対話的学び」:73.4%、「主体的学び」86.2%(平均値79.8%)の肯定的評価であった。</p> <p>また、学校評価(自己評価)アンケート「学習意欲」に関する項目では、児童C～E回答が約31%を占め、特にEが15%と比較的高いことから、「すすんで学習している」と自覚できていない児童が一定数存在することが分かる。学習内容の難しさや学習方法への不安、学習への見通しのもちにくさなどが、意欲の低下につながっている可能性が考えられる。保護者の回答においても、C・Dが約25%見られ、「取り組んではいるが、主体的とは言い切れない」と受け止められている状況がうかがえる。</p>	<p>共通理解を図り、授業づくりに取り入れる運動例等を提案することができた。また、年間を通じて長なわとびに取り組むとともに、スポーツフェスティバル種目として取り入れたことが児童の運動技能や運動に親しむ意識の向上、運動の日常化につながった。恵まれた施設環境を生かし、暑熱下においても日常的な身体活動を維持・推進することができている。</p>	
<p>学校運営協議会評価</p>	<p>○誰に対しての「あいさつ」なのか、児童、保護者、教職員でそれぞれ受け取り方が異なっていたかもしれないが、客観的に見て望ましい結果になっていると思う。 ○「一人一人違うことがある」という事に気付く機会を与えることは素晴らしい。学校生活の中でも経験して欲しいと思う。</p>	<p>○基礎的学力のある児童が多い印象である。ICTの活用によって学力に不安のある児童の基礎学力向上に繋がっていくことを期待する。 ○結論ありきで学ぶのではなく、紆余曲折して答えを見つける過程を経験することは、非常に意義があると思う。結論よりも、そこに至る過程や思考こそ大切にしたい。</p>	<p>○より専門的な指導を行うための方策として、低学年から体育の教科担任制について検討が必要かもしれない。 ○クラス単位で長縄跳びを行う試みは、運動の苦手な子どもも参加することで身体活動量増進に繋がると思う。練習過程の中でうまく団結できないこと等の課題が生じたときに、児童が自分たちの力で対応するなどの効果もあると感じる。</p>	
学校の特色を生かした領域 <短期的な経営目標>				
	<p>4 特別支援教育の充実</p>	<p>5 安心・安全な学校づくりの推進</p>	<p>6 地域とともに歩む学校</p>	
<p>自己評価</p>	<p>(1) 具体的な取組</p> <p>①いじめや不登校などに適切かつ迅速に対応できるような教員一人一人の教育相談機能や生活指導部を中心とした指導体制の充実に努める。また、いじめ対策委員会、不登校対策委員会、特別支援校内委員会等を中心に相談機関を活用したコンサルテーション機能の充実・連携を図り、児童や家庭個々の状況に応じた支援体制を築き、支援を行う。</p> <p>②特別支援教育の充実を図るために、特別支援教育コーディネーターの複数指名、特別支援教育の専門性が高い教員を中心とした校内会議やOJTを行い、教員集団の特別支援教育にかかる指導技術の向上を図る。また、通級指導教室担任による、特別支援教育理解・啓発授業を各学級にて実施する。</p> <p>③通級指導教室を終了した児童が在籍学級で指導の成果を確かめ、より円滑に学校生活を送ることができるようにするための支援として、児童・保護者のための「ホーム・カミング・デイ」の取組の充実を図る。</p> <p>(2) 成果(数値目標に対して)</p> <p>①学校評価(自己評価)アンケート「一人一人を大切にした指導・支援」に関する項目では、肯定的意見(A・B)の割合は、教職員が100.0%と極めて高く、校内において支援体制が整えられ、組織的かつ継続的に活用されているという強い認識が示された。教職員間での連携や専門性を生かした支援が、日常的な指導の中で機能していることがうかがえる。一方、保護者の肯定的意見は78.3%と一定の評価が得られているものの、Eが17.3%と比較的高い割合を占めている点が課題として挙げられる。個に応じた支援の在り方や支援体制、本校における取組について十分に伝わっていないことが考えられる。</p>	<p>(1) 具体的な取組</p> <p>①全教育活動を通じて児童の道徳性を養うとともに、いじめの撲滅のため、いじめ対策委員会を随時開催し、未然防止と解決に努める。また、調布警察署や調布警察スクールサポーターと連携し情報収集を行い、問題行動の未然防止の取組を行う。</p> <p>②全職員が学校生活及び施設設備における安全確保と危険回避に向けた改善意識を常に高くもち、役割分担を明確にしながら児童の安全を守る。休み時間等教員が児童と共に遊びに参加し、児童の安全確保に努める。</p> <p>③食物アレルギー等個々の特性に応じた、安全で確実な給食や調理実習等を実施していく。同時に食物アレルギー反応に対する危機管理できる体制づくりと研修の充実により人材の育成を図る。</p> <p>(2) 成果(数値目標に対して)</p> <p>①学校評価(自己評価)アンケート「学校生活」に関する項目では、肯定的意見(A・B)の割合は、教職員が100.0%、保護者が98.3%と非常に高く、学校全体として、子どもが安心して学校生活を送ることができる環境づくりに努めていることが、高く評価されていることが分かる。学級・学年・学校の組織的に連携した取組が、保護者の安心感にもつながっていると考えられる。一方、児童の肯定的意見は80.3%と、多くの児童が「学校で楽しく過ごしている」と感じているものの、教職員・保護者と比較するとやや低い結果となった。児童の回答では、C～Eが約20%見られ、特にEが10.8%と一定数存在していることから、学校生活に対して不安や楽しさを十分に実感できていない児童がいることがうかがえる。</p>	<p>(1) 具体的な取組</p> <p>①学校と家庭や地域社会との連携をさらに深め、学校周辺の環境を活用した地域学習、地域の人材を生かした学習活動等、地域社会の方々や文化に触れる機会を通して、地域の一員としての自覚を促すとともに、相互の連携を深める交流事業を通して、さらに開かれた学校づくりを目指す。</p> <p>②地域運営学校(コミュニティスクール)の開設初年度となる。地域・保護者から信頼される学校となるよう、教職員と地域・保護者との連携の一層の充実を図る。地域協働本部との連携を充実してことで、地域を教材とした学習(生活科・総合的な学習の時間:キャリア教育、野川探索、地域探索等)を実施する。</p> <p>③全校一斉保護者会の実施や学校教育参観日。個人面談等だけでなく、日々、保護者と連携を図ることができるよう、情報の発信に努める。また、ちょうわ地区協議会や健全育成推進調和地区委員会との連携や地域協働本部を中心とした学習活動の展開を図る。</p> <p>(2) 成果(数値目標に対して)</p> <p>①学校評価(自己評価)アンケート「地域連携」に関する項目では、肯定的意見(A・B)の割合は、教職員が97.4%と非常に高く、地域との連携を重視した教育活動が、学校経営の中で意図的かつ継続的に進められているという認識が示された。外部人材の活用や地域行事との連動などが、教育活動の充実につながっていると考えられる。保護者においても、肯定的意見は89.3%と高く、学校が地域と協力しながら子どもを育てていることについて、概ね理解と評価が得られている。一方で、Eが6.9%見られることから、具体的な取組内容や成果が十分伝わっていないことが考えられる。</p>	

	②年間を通じて、ホワイトボードミーティングによる校内会議やOJTを行うことで、特別支援教育の理解や指導技術の向上につなげることができた。また、通級指導教室拠点校のよさを生かし、通級指導教室担任による、特別支援教育理解・啓発授業を実施したり、連携型個別指導計画作成を進めたりすることができた。さらに、ホームカミングデイの取組により、通級指導教室を終了した児童が在籍学級でより円滑に学校生活を送ることができるようにするための支援につながっている。	A	②学校評価（自己評価）アンケート「学校安全」に関する項目では、肯定的意見（A・B）の割合は、教職員が100.0%と非常に高く、安全指導が計画的かつ継続的に実施されているという校内の共通認識が示された。防災訓練や安全教育の実施、関係機関との連携などが、学校全体として着実に進められていることがうかがえる。保護者においても、肯定的意見が91.6%と高く、学校が子どもたちの安全確保に努めていることに対し、概ね信頼が寄せられていることが分かる。一方で、Eが5.5%見られることから、安全指導の内容や取組の様子が、家庭に十分伝わっていないと感じていることも示唆される。	B	②学校評価（自己評価）アンケート「情報発信」に関する項目では、肯定的意見（A・B）の割合は、教職員が97.4%、保護者が97.1%と、双方ともに非常に高い評価となった。学校からの情報発信が、頻度や内容の面で概ね適切に行われており、保護者が教育活動や児童の様子を把握できていることがうかがえる。教職員においても、自らの情報発信の取組が、家庭との連携に有効に機能しているという認識が共有されている。紙媒体とICTを併用した多様な情報提供の手段が、保護者のニーズに応じた情報取得につながっていると考えられる。一方で、C・Dの回答が少数ながらあることから、情報量やタイミング、内容の分かりやすさについて、さらに工夫の余地がある。	B
学校運営協議会評価	○知らない保護者が多数派でしたが、関係した保護者は非常に高い肯定感を持っていると感じる。 ○完成系はなく、改善を続けることで何とか維持できていると思う。継続可能な支援になっていることを期待する。		○児童の学校生活における肯定回答は80%に留まっているが、分からないが10%いるため、否定的回答は10%に収まっている。保護者の肯定回答は98%に上り、学校生活や校内環境への不満はほぼないと考えられる。 ○児童の心の不安が言動ではなく身体の不調として現れる場合もあるため、保健室での見守りは大切だと思う。 ○食物アレルギー事故防止に向けては、調和小に限らず市内の学校はとても丁寧に配慮されており安心している。		○保護者の肯定的意見が89%あり、否定的意見は4%に留まっている。学校の地域団体への配慮とすぐーるによる情報発信は効果が出ていると思う。 ○学校は地域に対して強く配慮して頂いて、感謝している。地域活動を続けられるよう、今後も協力関係を続けられることを願う。 ○OPTAではLINEオープンチャットを展開しており、地域イベントやサークル等の情報を発信している。すぐーるで配信した方が望ましい場合もあり、使い分けを検討できたら嬉しい。	

人材育成・組織運営	
自己評価	○主幹教諭・主任教諭を中心に日常的・意図的なOJTをそれぞれ推進しながら、職員相互に研鑽を図ってきた。ミドルリーダーとしての主任教諭には、学校運営にかかわる明確な役割を示すことで組織貢献意欲を高めることにつなげている。 ○課題の共有と解決に向けての協議、児童・保護者・地域などの情報共有、予算管理、施設管理、危機管理などの校務の進捗状況を確認することを繰り返し、教職員一人一人がもつ、よさや強みを生かしながら職務を遂行していくことにより、「チーム調和」としての一体感の高まりが感じられるようになってきた。
学校運営協議会評価	○学校運営協議会が教職員と会話する機会を設けて頂き、嬉しく思う。教職員の皆さんが「児童第一」で考えられており、頭の下がる思いである。 ○教職員の経験の違いや児童との関係性等で課題が生じることもあるかと思うが、特定の教職員で抱えることなく、組織で対応して教職員が相互に助け合う形を取ることは、とても良いことだと思う。児童も教職員も逃げ場を作ることで解決することがあると思われるので、学級担任制を緩める動きに賛同する。 ○目指す児童像が素晴らしい。お互いを大切に、そして思いやる気持ちをもち続けることを忘れずにいられる学校であることが意識されていてとても良いと思う。対立しても対話で解決する力を育てていきたい。 ○学校評価（自己評価）アンケートにおいて、児童、保護者、教職員とそれぞれの立場の違いに合わせて文言を調整したことで意図が正しく伝わった。反面、児童と保護者を1対1に組み合わせたアンケートにしたことで複数の児童が在籍する家庭では回答の際に混乱があった様子で、課題が残った。

中期的な経営目標の達成状況
<p>1 協力・協働のハーモニー</p> <ul style="list-style-type: none"> ・異学年交流や道徳教育、体験的活動を引き続き充実させるとともに、児童が「自分は人を大切にできている」「思いやりのある行動ができた」と実感できるよう、具体的な行動を認め、価値付ける場面を意図的に設定していくことが重要である。また、こうした成長の姿を家庭とも共有し、学校・家庭が連携して豊かな心の育成を一層推進していく。 ・行事の事前段階で児童一人一人が「自分なりの目標」を明確にもてるよう指導・支援するとともに、活動の途中や振り返りの場面で達成感や成長を実感できる工夫が求められる。また、児童の目標や努力の過程を可視化し、家庭と共有することで、学校行事がより主体的な学びと成長の場となるよう改善を図っていく。 ・「なぜあいさつが大切なのか」など、あいさつをすることの価値を児童自身が実感できる指導の工夫が求められる。また、学校での取組や子どもたちの変容を、保護者にも発信し、家庭と連携してあいさつの定着を図ることが重要である。きまりや基本的な生活習慣について、繰り返し指導を行うとともに、できていることを具体的に認め、評価することで、児童が自信をもって行動できるよう支援していくことが重要である。また、家庭との連携を一層深め、学校と家庭が同じ視点で生活習慣の定着を図っていく必要がある。 <p>2 学びのハーモニー</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これまでの授業改善の取組を継続するとともに、つまづきに応じた支援や指導の工夫を一層充実させていくことが重要である。また、分かったことやできるようになったことを実感できる振り返りの場を設定し、児童の学習への自信を高めることで、「分かる授業」の実感をさらに高めていきたい。また、発言の仕方や考えの伝え方について段階的に支援するとともに、小集団での対話やICTを活用した意見共有など、参加しやすい学習形態を工夫していくことが重要である。また、学び合いによる理解の深まりを振り返りの場で可視化し、児童が成長を実感できるようにすることにより、主体的な学びの定着につなげていく。 ・児童が学習の見通しをもって取り組めるよう、目標設定や振り返りを重視した授業づくりを一層推進するとともに、「分かった」「できた」という達成感を積み重ねる支援が重要である。また、家庭と連携し、学習の進め方や成果を共有することで、児童の学習意欲を学校・家庭の両面から高めていく。 <p>3 心と体のハーモニー</p> <ul style="list-style-type: none"> ・体育授業や体育的活動の充実を図るとともに、技能の優劣に偏らず、誰もが達成感を味わえる学習内容や評価の工夫が重要である。また、個々の体力差や特性に応じた声かけや支援を行い、運動に対する自己肯定感を高めることで、生涯にわたって運動に親しむ態度の育成につなげていく。 <p>4 児童一人ひとりに応じたよりよい指導・支援のための特別支援教育の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現在の支援体制を引き続き充実させるとともに、通級指導や相談体制の役割、活用の流れについて、保護者に分かりやすく周知していくことが求められる。また、早期発見・早期支援の視点を大切にしながら、家庭と連携した切れ目のない支援を進め、すべての子どもが安心して学べる教育環境の整備を一層推進していく。 <p>5 安心・安全な学校づくりの推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これまでの取組を継続するとともに、児童一人一人の声や小さな変化を丁寧に捉え、早期に支援につなげる体制を一層充実させていくことが重要である。また、児童が「楽しい」「安心できる」と実感できる場面を意図的に増やし、学級活動や学校行事等を通して自己肯定感や所属感を高めることで、すべての児童が安心して過ごせる学校づくりをさらに推進していく。 ・安全指導を継続・充実させるとともに、訓練や指導のねらい、実施状況、成果について、学校だよりやホームページ等を通して、より分かりやすく保護者に発信していくことが重要である。また、家庭や地域と連携し、学校内外を通じた安全意識の向上を図ることで、子どもたちが安心して生活できる環境づくりを一層推進していく。 <p>6 地域とともに歩む学校</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域の教育資源や人材の活用をさらに充実させるとともに、そのねらいや学びの成果を、学校だよりや行事報告等を通して分かりやすく発信していくことが重要である。地域とのつながりの中で育まれる学びの価値を共有することで、家庭・地域・学校が一体となった教育活動を一層推進していく。 ・現在の情報発信の取組を継続するとともに、より伝わりやすい工夫を重ねていくことが重要である。家庭との双方向のコミュニケーションを大切にしながら、信頼関係の構築と学校教育への理解促進を一層図っていく。
次年度の重点課題
<ul style="list-style-type: none"> ◇「豊かな心」＝「調和の心」の育成を重点とした、全教育活動を通じての「自他尊重の精神の涵養」の一層の推進。 ◇「学校行事」、異学年交流「たてわり班活動」の充実や「体験的な学び」、「あいさつの励行」の推進による豊かな心の育成。 ◇校内研究と関連付けた児童が主体となる授業づくりの推進と主体的・協働的に学び合う児童の育成。 ◇児童が主体的に運動に親しむための体育授業・体育的活動の充実と保護者・地域と連携した運動の日常化の推進。 ◇安全・安心な学校づくりの推進の継続。 ◇通級指導拠点校としての強みを生かした、一人一人を大切にしたい指導・支援の充実の継続。 ◇学校運営協議会や地域学校協働本部を核とした地域連携の一層の推進。